
レニーの入院生活日記

やまく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レニーの入院生活日記

【Nコード】

N43620

【作者名】

やまく

【あらすじ】

レニーは実験的な治療を受けるために、王立学院の研究科に行く事になりました。

学院に通っている、心配性の幼馴染にはこっそりと・・・。

日記形式の一人称です。

レニーの入院生活日記（前書き）

はじめまして

様々な方の小説を読んで、触発されて書いてみました。

超みじかいです。

ヒロイン一人称 日記形式 です。

世界観はファンタジーですが とくにそれっぽいことはできてきません。

レニーの入院生活日記

1日目（晴れ）

今日から王立学院の付属研究科棟での治療が始まる。

鞆一つだけの荷物は、年頃の女の子にしては少なすぎだと自分であきれた。

本は図書館を利用出来るときいているし、あまり出歩かないので着飾る小物も持ってこなかった。

滞在する部屋は三階の個室で、寝台と、寝台横の棚、椅子と書きものの机、衣服戸棚、あとは小さな洗面台一つがある。
ひとつの部屋にすべてが収まる。

あとは窓があり、研究科棟と学院棟のあいだの中庭が見渡せる。植物が見えるのは嬉しい。

学院にいるミリオンには知らせていない。急ぎで決まった話だし、彼は繊細で心配性だから色々心労を与えたくない。

二年前の高熱を出して近所の医院に軽く入院した時のようになっては困る。あの時は試験を放り出して帰って来た。幼なじみの体調ひとつに動揺してどうするんだ。もう兄は独立して学院にいないから、追試してもらえないんだぞ。

そういえば、学院まで送ってくれた兄が去り際によくわからない事を言っていた。

「餓えた虎の目の前にわざわざオマエを放り込む必要は無い」
学生寮は獰猛な虎を飼っているのだろうか？ちよつと気になる。

2日目（晴れ）

昨日は契約の確認と施設の案内だけだったので、今日は朝から専任医師との顔合わせと治療計画の説明、体の進行状況を確認するための検査をした。

夕方自室に戻るとミリオンからの手紙が自宅から転送されて届けられていた。

秋からの新学期が始まったそうだと。今は第3学年だったと思う。前学期の成績はトップだったそうだと。彼は本当に頑張り屋だ。約束通り何かごほうびを送らねば。近況をどう説明しようかな？

3日目（少し曇り／肌寒い）

引き続き検査。慣れたものと、見知らぬ装置を使った検査方法とがあった。

午後から日用品を買いに街へでかけるから、ついでにミリオンへの返事の手紙を出してこよう。

学院全体の地図をもらったので、ミリオンがいそうな場所を確認しておこうと思う。次の手紙で彼の日常についてきいてみよう。

4日目（晴れ／あたたかく過ごしやすい）

検査結果待ちなので今日は図書館へ行く。研究科棟には図書館から貸し出し本の集荷と配達サービスがあるそうなので、利用申し込みをする。

書架を回って気になる本の名前をメモして、後日研究科棟から注文するための蔵書リストを作った。
これでこまめに図書館へ行かずに済む。

昼は学院の食堂を初めて利用した。自分と同じ年くらいの学院の生徒が沢山いた。

職員以外はみな制服を着ていたのでちょっと緊張した。ミリオンと出くわす可能性もあるので隅の柱の陰の席でこっそり食べた。

学院の女の子達は皆可愛いらしくて、制服がよく似合っている。髪型も凝っていて、どう編んでいるのかぱっと見わからなかった。あれは何編みというのだろうか。

5日目（曇り）

ミリオンから手紙の返事が届く。早い。私からの返事が嬉しいと書いてあった。やはり元気であると伝えておく方が安心できるようだった。

家への手紙にミリオンへの手紙を同封して、向こうからミリオン宛に発送してもらう事を思いつく。これなら街まで出かけられない時でも返事を出せる。

時間があるから返事を書いた。普段の学院での生活について、怪しまれずにどう聞き出すか文面を考えるのがスパイ小説のようで楽しい。

7日目（曇り）

検査の結果発表。症状はみごとに進行していた。いくつか薬を飲んで効果をためし、効果をみたあと五日後にどの治療法でいくか決定される。

治療研究として費用を負担もらえるとはいえ、自分で決められないのは不安だ。

午後、学院を散策していると、ここに来て初めてミリオンを見かけた。彼は友人達と歩いていた。

制服姿だと一瞬気付かず、危うく遭遇するところだった。彼は少し会わないうちに肩の辺りがしっかりして、手足も伸びた感じがした。何か運動などしているのだろうか？女の子のように綺麗だった顔には男っぽさがでていた。あまりごつくなってくれるなよ中庭を歩いている姿も見かけたので、どうも研究科棟に出入りしているようだ。

11日目（そこそこの雨）

ミリオンからの返事が届く。やたら長い。便せんの枚数も多い。学生生活の、特に人間関係の事が多く書いてあった。

ミリオンの周り友達や課題チーム仲間は男の人が多いようだ。いつも男子寮の仲間と過ごしているらしい。

しかし誰とご飯を食べたのかはいいから、普段いる場所についてもうちよつと書いて欲しい。彼女がいないのはもうわかったから

ミリオンは専攻が研究科のコースで、副専攻を騎士科のコースをとっているそうだ。宮廷医師でも目指すのだろうか？確か宮廷関係の仕事は騎士の資格が必要だったはず。騎士か。かっこいいな。

看護員の人に尋ねたら、研究科棟は私のような治療研究の実験に関わる者と、学生達が出歩く場所とは明確に分けられているのだそう
だ。ちよつと安心。

12日目（午後から晴れ　夕焼けがきれいだった）

治療法が決まった。一番マシだと思った方法だ。

ちなみに一番嫌だった方法は体をまっふたつにして、それからひとつに繋ぎ直して治療するものだった。それよりはかなりマシだ。

薬と道具を使つて一ヶ月ほどかけて全身の命脈を停止させ、ゆっくり治療を開始する。時間も気力もひたすらかかるが、一番リスクの少ない方法だ。体に傷も残らないし、うまくいけば同じ症状で苦しむ人たちの治療に使える。一度仮死状態になるけど。

三日後から治療開始。

家に手紙を書こう。

13日目（晴れ　冬の気配がする寒さ）

家に手紙を出した。

同封したミリオンへの手紙には、年末に帰省した際に遠地で療養中で会えないと書き、なんとか完成したマフラーと一緒に送った。

18日目（晴れ）

ミリオンに送ったマフラーはなかなか綺麗に編めたと思っていたけれど、先日部屋の窓から中庭を歩くミリオンを見かけた時、遠目からでも彼のマフラーの色は変だった。派手に目立っていて、あからさまにおかしかった。もっと制服と色の取り合わせを考えるべきだった。

作り直すから返せと手紙に書いたなら断られた。

見かけるたびに申し訳ない気持ちになる。というか違うマフラーをしてくれ。

20日目（曇り）

杖を使って歩くようになったので、あまり遠出しなくなった。

あのマフラーを見かける回数が減って精神的にちょっとホッとしている。

中庭で女の子からマフラーをプレゼントされていたので、あれを使っ
ていてもらえると助かる。

25日目

へんじか けないので ひろった きれい落ち ば 入れた。

35日目（雨）

入院から一ヶ月。ついに学院にいる事がミリオンにばれた。早い。なんでも封筒に入れた落ち葉がこの学院の敷地内にしかない種類だったらしい。あの時期は薬でぼううとしていたのでそこまで思いつかなかった。

あとはうちの兄からの手紙に私の事が少なかった事と、最初の手紙の消印が学院のある街のものから推理したそう。ぬかった。というかどうしてそれで気付けるのかわからない。

ミリオンからの手紙では黙っていた事を責めていたが、どこにいるのかは分からないらしく、何科に編入したのか聞いていた。返事を書く気になれなかった。正直会いたくもない。

万一この場所にいることが知られても、無許可で棟内に入れないから大丈夫だろう。

41日目（晴れ　夕焼けがきれいだった）

運動がてら図書館に本をかえしに行ったとき、ミリオンが現れた。本当探偵に向いてるよ、アンタ。もしくはスパイとか暗殺者とか猟師とか。

いぜん私が手紙に書いた読んだ本の内容からタイトルを割り出し、私の最寄り図書館が北の小図書館だと断定して、毎日いりぐちが見える場所で勉強がてら見張っていたのだそう。

その根性というか執念というか・・・驚きを越してあきれてしまった。王立学院の生徒は暇なのだろうか？

へろへろになって杖をついている姿をみられなくなかったけれど、

走って逃げられなかった。

ミリオンは驚いたというより硬直していた。彼の顔はこわばっていた。幼なじみがこんな姿になったのを目の当たりして衝撃だったろうな。

しかたないから説明しようとしたらいきなり抱きついて来た。びっくりしたがミリオンの腕が震えているのと、そっと抱え込まれたようなかただったので拒絶する気にはならなかった。

ミリオンは小さい頃から泣くのを我慢する時に震える。

しかたないから昔のように彼の髪をなでながら笑いかけると、ミリオンは泣き出してしまった。折角の色男がだいなしだ。あと私の肩に鼻水をつけないでほしい。

60日目（晴れ）

面会の許可がおりてからミリオンは私の個室にちよくちよく来るようになった。いやかなり頻繁といっている。しかもいつもやたらニコニコしている。

あんまり来るので私が怒ると、それすらも喜ぶ。訳が分からない。私としてはミリオンが来て話し相手になってくれると気が晴れるからありがたい。

「レニーの治療はちよつと時間がかかるだけだから。時間さえかければ元気になるんだから」と言ってくれて、気持ちが楽になった。夜中に思い出してちよつと泣けたのは秘密だ。

けれど、彼は学生なのだからちゃんと勉強して欲しい。最近では看護員に教えてもらって私の補助をするようになってしまった。

すこしでも成績がおちたら二度と会わないと言つと、「成績がよければずっとそばにいてもいい」と解釈したらしく、ずっといる。成績はちゃんと専攻と副専攻でトップのまま。飛び級する勢らしい。

なにもできない私への嫌みか。

「俺とレニーあわせてちょうど二人分になるからいいんだ」
何がだ

腹立たしいのでちょっとでも成績が落ちたら私の髪を切つてやると脅している。最近ではミリオンが手入れをしてくれるので、髪にはかつてのキューティクルと手触りが戻っている。ミリオンはこの髪を手入れすることが好きらしい。いつもいじくっている。トリートメント剤もわざわざ自分で持ってくる。

研究科棟の食堂であまり出ないお菓子や、傷みやすくてなかなか手に入らない果物も持ってきてくれる。嬉しいけれど学生の身であり他人へ出費しないで欲しい。研究の手伝いで少し稼いでいるらしいけど、もっと自分の楽しみに使ってほしい。そう言うといつも彼はこう言う。

「大丈夫、十分楽しみに使ってるから。それに俺は将来は二人分、いやそれ以上稼ぐからね。安心してね!」
何をだ

<おわり>

レニーの入院生活日記（後書き）

いつもは読み専なのですが、秋っぽくせつない感じの話を書いてみました。

この話は肉付けして、描写を増やしていけば中編くらいにはなりそうだと思いましたが、このままでもあっさりしていいのではと思います。思い切って投稿してみました。しかし短い。

日記形式は「本人が書いている」という設定だけに、あえて書かれていない部分があります。レニーが書きたくないと思った事は書かれてなかったりします。

次話は追補編「彼の独白」です。

追補編「彼の独白」(前書き)

「レニーの入院生活日記」追補編
ミリオンの独白版です。

追補編「彼の独白」

「彼の独白」

レニーが検査に行っているあいだ、彼女の日記をこっそり読ませてもらうのが俺の日課だ。

もう何度も読んでいるが、正直持つて帰って飾りたいくらいだ。そして毎晩読んで悶えまくりたい。

俺と遭遇しないかどきまぎしてるレニーなんて特にツボだ。

初めて発見して中を読んだときは嬉しさのあまり三日くらいハイになつて寝れなかった。あれは自分でちよつと恐かったな。平気どころかいつもより調子良かったもんな。

バレたらレニーなんて言うかな。怒るかな。あまり彼女の体に障らないようにしないと。

なんとかして転写して持つて帰りたい。彼女の筆跡で俺の名前が書かれた部分だけでもいい。発明好きの友人に転写装置を作ってもらえないか聞いてみるか。

彼女が小さい頃から抱えている症状は、俺の思っていた以上の早さで進行していた。彼女には黙っているけれど、専攻の研究科で取り組んでいるのは彼女の症例についてだったりする。彼女に施されている治療法も俺が提唱した。早く効果を実証するための実験段階はプロに丸投げしていた。まさか彼女が実験の被験者になるなんて思わなかったけど。

こんなことになるのなら副専攻なんて持たずにさっさと卒業して学院の研究員になって、レニー専属医になればよかったと思う。

でも日記で騎士になる俺がかっこいいと書かれていたのには、嬉しくて頭の血管が切れるかと思った。レニーは騎士にあこがれてたもんな。だから絶対なりたかった。

レニーが学院にいるのを知った時の手紙は存在を消したい（思い出すだけで自分の首を締め上げなくなる）けれど、俺からの手紙はすべて大切に保存されているのを見ると、手が出せなくなった。

それらには俺が持っているレニーからの手紙のように、何度も何度も読み返した跡があった。それを発見した直後に参加した伝統の地獄のサバイバル演習では、俺は始終満面の微笑みで過ごしていたらしい。あの時は仲間が本気で心配されたっけ。教官も青い顔をしていた。

俺にとって騎士科の過酷な訓練より、レニーが俺以外の男の話を嬉しそうにすることのほうがキツイ。あれは生皮をはがされて氷の世界に放り出された気持ちになる。

最近レニーと少しずつ治療が終わったら何をしたいか話をしていく。彼女には前向きな希望を持っていて欲しい。できれば俺と同じ希望を。

「合コンに行ってみたい」「却下！」

追補編「彼の独白」（後書き）

彼の独白です。

レニ―の設定や世界観については、あえて説明を省いた部分があります。

超久しぶりに物語を、勢いのままに書いたので、わかりにくい部分もあるかとおもいます。話を書いてみて、毎日掲載や、長編連載している作家さん達は本当に凄いと実感しました。

今後の参考にもなりますので、感想いただけるとうれしいです。

しかしキスシーンも「好き」や「愛してる」の言葉もないのに恋愛カテゴリーって・・・

演習と巾着 前編（前書き）

思いついたので続きっぽいもの書いてみました。

演習と巾着 前編

ミリオンが最近暗い。半月にもものぼる課外授業があるらしい。騎士科の演習とは違う、全科一緒におこなう大規模なものらしい。

「レニーに二日以上会えないなんて俺どうにかなっちゃうかも」

ミリオンが酷く暗い顔つきで言っていた。

私がここに来る前は会わない日がほとんどだったと突っ込めば、さらに陰気臭い顔つきになった。

山と森に囲まれた場所に行くらしく手紙のやりとりもできないそうなので、応援の意味もこめてお守りを作ってみた。有り合わせのものを有効活用したので大したものではないが

演習の出発日の朝、それを紙袋に入れて見送りの場に向かった。

けっこう寒かったがわりと体調はいいし、いまだ杖を使う必要はあるがそこそこ歩ける。学院の門のところまでなのでそう遠くないから平気だと思った。たまには朝日を外で眺めるのも悪くない。

けれど門のところまでいくと人だかりに圧倒された。一つの学年だけとはいえ全科の生徒がいるのだから当たり前だ。むしろこの状況に思い至らなかった自分のにぶさにあきれた。

元気の良い学生たちに圧倒され、ミリオンを見つけるのは無理だと早々に諦めて部屋に戻ることにした。

だが途中の中庭に差し掛かる辺りで、ミリオンを見つけることが出来た。

彼は門に向かう途中だったらしく、男女入り乱れた仲間達と一緒にいた。それぞれが荷物を抱え、皆で楽しそうに何かを話している。

ミリオンの世界は輝いていた。

私にはあの集団に向かって一人声をかける勇氣はなかった。

することが無くなったので、彼らに見えない位置からミリオンの様

子を見守った。草葉の陰から見守るといふやつだ。

ミリオンは時々病棟の方をみているが、なにかあるのだろうか。せっかく友人たちが話しかけてるのだから集中したほうがいいと思う。ひよっとすると私の部屋を気にしてるのだろうか？ 昨日はお守りを作るのを見られなくなって部屋に入れなかったから、少し気にしているのかもしれない。彼は心配性だ。私はそんなに寝こんでばかりではないぞ

まさか私がここにいるとは思わないだろうな。何も告げてないし。挨拶はできなかったが見送ることは出来たと、彼の想像している“病弱な私”の通りにベッドに横になって大人しくしていようかと足を踏み出す。

「おまたせゝ忘れ物とってきたよー」

間延びした声とともに走ってきた子とすれ違う。元気潑刺とした女の子だった。その子の荷物と、手がぶつかり持っていた紙袋を落としてしまう。

杖に体重をあずけながらめいっばい手を伸ばして紙袋を拾い、身体を起こすためまいがした。

少々歩き過ぎたせいだろう

病棟の裏手にまわり、目についたベンチで休んだ。

変な汗が出てきてぐったりしていると目の前に人が立つ心配がした。

「大丈夫か？」

見上げると、黒尽くめの服装をした青年だった。

「それでは散開し、各自拠点設営に入れ」

教官の声が胸につけたボタンから聞こえ、皆この演習中生き残るために動き出す。

俺はさつきからかけられる声を聞くふりをして、地図を広げて眺める。

この演習は全科合同で行なわれるサバイバル演習だ。内容も簡単で、要は最後まで規定通りの状態で生き残っていられればいい。実力に自信がない奴らは協力しあう。

すでに開始前からチームを作っている奴もいて、俺も誘われたが断った。学年トップの成績だから俺を引き入りたい奴は多い。

だがこの演習、完全に個人で評価される。チームだろうがなんだろうが、生き残った際の状態の良い順で成績が割り振られる。

だからたとえ協力しあう関係の相手でも油断はできない。

隙あらば蹴落とす。そんな奴らに俺の不調なんて知られるわけに行かない。特に成績上位を競う相手にバレル訳にはいかない。

早々に森に入り、事前に目を付けていた巨木を拠点にすることにした。目眩ましの仕掛けをかけ、あとは他の奴らにここがバレないように動き、最低限のミッションをこなした後はここで演習が終わるのを待とう。

「ああ、レニー不足だ……」

正直、学院に来たレニーと再会してから俺のレニー病は加速する一方だ。会えば会うほど、触れれば触れるほど彼女を求める量が増える。少しでも彼女と離れる時間があるのは嫌なくらいだ。

昨日なんて声しか聞けなかったのに、これから何日も会えないなんて。

この演習が成績に大きく関わるのでなければサボりたいくらいだ。

「おい、」

レニー、元気にしてるかな。最近また寒くなってきたし、体壊して

ないかな。毛糸の上着と帽子とマフラーとでもこもこになったレニ
ーは可愛いだろうな。きつと抱きついたら真っ赤になって怒るんだ
ろうな。

ああ、会いたい。声だけでも聞きたい。

「おい、ミリオン、なんだにやにや笑って気持ちの悪い」
うるさいな

「なんだよ」

見ると同じく巨木に拠点を定めた騎士科の奴がいた。

「お前ここでもその黒い服着ているのか」

「ほっとけ。夜だとかつちのほうがいいだろうが」

この巨木、周囲に獰猛な肉食植物が生い茂り、毒ガスが出る沼が傍
にあるので対処法を知らないと滞在するだけでかなり危険だ。毒に
詳しく肉食植物に襲われても対処できないと立ち入れないので独占
できるかと思っていたが、学年二位のこいつも拠点にしていた。

「さつき不可侵の約束をしたのに、何だよ」

「何だ、機嫌の悪い奴だな……。ちょっと聞きたいだけだ」

そう言う奴は俺の隣に腰掛ける。なんだよ一体

「ミリオン、お前病棟に出入りしてるだろう。俺たちくらいの年で
杖について歩く女の子を知らないか？ 不思議な色の長い髪をして
いる」

「・・・その子がどうした？」

「いや、ちょっと助けただが、気になっただけ」

「助けたって、何を？ どこで？」

「病棟の裏手だ。体調が悪そうにしていたから病室まで送っていつ
た」

「それ、いつの話」

「俺達が出発する時の朝だ。集合場所に向かう際にな。御礼にと、
これを貰った」

そう言う奴はポケットから派手な色の巾着を取り出した。

「珍しい色だね」

「その子が助けたお礼にとくれたんだ。中に滋養強壯の飴が入っていた」

「ふうん」

落ち着け、落ち着け俺。冷静な顔をするんだ。

「きつとそれ、彼女の手作りだよ。縫い目、ちよつと荒いでしょ」

「そうなのか、それは大事なものを貰ってしまった。帰ったら何か御礼をしようと思うんだが…なあ、あの子は何か病気なのか？」

「患者のプライバシーは訊かないほうがいいよ。本人も知らないところで訊かれるのは傷つくだろう」

「そうか。すまん」

「もう演習も始まった。雑談はなしだ」

そう言つて俺は木から飛び降り、走りだした。

演習と巾着 後編

ミリオンが出発した日までの日記を書き終わり、一息つく。

彼が出発してからの分は書く気になれない。というか、あまり書くことがない。その後、黒服の青年に助けられて部屋に戻り、寒さのせいか軽く熱を出していた。ようやく意識がはつきりするようになったが、ずっと寝込んでいたせいか眠気は未だこないし、手元の本は読んでしまった。

特にすることがないのでこれまでの日記を読み返してみると、最近のものはやたら彼についての記述が目につく。元々は闘病日記のつもりで書き始めたのにな。

ため息と一緒に笑が漏れた。

「レニー」

「ミリオン？」

突然の声に部屋を見渡すが、誰もいない。扉の窓にも人影は写っていない。

何だ？ 幻聴か？ それともミリオンが演習中に死んで化けて出たとかか？

「レニー、ここだよ」

ガラスを叩く音がして、見ると窓にミリオンが張り付いていた。

「ミリオン？ どうしたんだ！ 演習は？」

「まだ期間中。あれ生き延びれば良いだけだから、ちょっと抜けて来た」

どこをどうやったのか、ミリオンは外から窓の鍵を外し、するりと

音も立てず入ってきた。器用な奴だ

出発の際に見たのと同じ格好で、ところどころ泥がついている。本当に抜けだしてきたようだ。何やってるんだ全く。森の奥って聞いたから遠くまで行くのかと思っていたが、けっこう近くだっただんな。

「レニーが体調崩してるって聞いていてもたってもいられなかったんだ」

「またそんな理由で…！」

「落ち着いて」

ミリオンはそつと窓を閉めると近づいてきた。

「体、大丈夫？」

「まったくもってなんともない」

ミリオンは黙って手袋を外して額に触れて来た。

「熱、あるね」

「すぐに治る」

「・・・うん。ねえレニー」

顔をあげてミリオンを見ると、彼の目には涙がたまっていた。

「な、何だ」

「お願いだから、俺のいないときはずっと元気でいて。レニーが辛いときはずっと傍にいたいんだ」

「どうして」

「俺がそうしたいから」

手を伸ばし、ミリオンの固く握られた拳を掴む。

「私のことなんて気にするな。たまにちょっと熱がでるだけで、いっただって元気だ」

だからお前は自分の世界で輝いていて欲しい。

それを見られるだけで、私は十分嬉しい。

載せていた手を離そうとしたら掴まれ、指と指が交差するように握られた。

「俺の心配なんていらない？」

私は彼から視線を外し、一呼吸して答えた。

「いらない。今まででだって沢山心配させたから。心配させて、そんな顔させるくらいならもう来なくていい」

そんな苦しそうに顔をしかめるな。なんでお前の方がそんな死にそうな顔になるんだよ

「でも、その、心配じゃなくって、美味しい果物とか持ってきてくれるなら来てもいい」

あんまり辛そうだからつい甘い言葉をかける。なんだかんだ言っても、いつもこうなってしまう

「うん。俺、よく熟れて甘いのをいっぱい持つてくるから」

「心配はもうするな」

「わかった。俺、もう心配なんてしない。レニーがちゃんと元気になるよう応援だけするよ」

目尻に浮かんだ涙をふいて、ミリオンは笑う。

「笑顔のほうがミリオンはかっこ良いな」

「えっ」

いつも笑顔でいて欲しい。そう願いをこめてミリオンの頭をなでて、彼の顔を確認せず布団にもぐる。そろそろ眠くなってきた。

「私を助けてくれた騎士科の人も格好良かったが、笑うとミリオンの方が格好良いな」

「…助けてくれた…？」

目を見開いて硬直していたミリオンがゆっくりと聞き返す。

「そいつ、もしかして黒い服着ていた？」

「ああ。知り合いか？ 今度よかったら紹介してくれないか」

物静かな青年で、彼となら話ができそうな気がする。友だちになつてくれるかもしれない。

「駄目。絶対に駄目」

なんでそこで怖い顔になるんだ。

「御礼したいんだ」

「巾着あげてたでしょう」

「あれは…お守りだから。演習の」

「お守り？」

ああまずい。眠気に流されて余計なことを言った。

「それ、俺の分はないの？」

ああ、言うと思った。いつも何かあげてるから。普通はそう思い至るよな。あれ、お前の分だったんだ。とは言えない。言つと絶対泣く。

「えっと、その…あの」

「レニー、そういえば出発の日外に出てたんだよね。何してたの？」

「えーとえーと」

「もしかして、そのお守り、俺のだったりする？」

「ええーとーおー」

見送りに行こうとして体調崩して、お守り渡せそうになくて他の人にあげたなんて言えば、ミリオンがどうなるのか想像がつかない。せつかく収めた心配症がまた復活してしまう。

「机の一番上の引き出しの中にミリオンの分がある」

失敗作だから自分で使おうと思ったやつだけど、この際仕方ない。

「一番上ね」

「自分で取るから」

同じところには確かミリオンからの手紙も入っている。触らせるわけにはいかない

「いいよ。レニーは寝てなきゃ」

そう言つとミリオンは私が起き上がる前に引き出しから変な色の布を取り出す。

いやまで、鍵がかかっていたはずなのに！

「これ、刺しゅう？ 俺の名前だ」

「う、うん」

ハンカチに刺繍して、文字の部分は見事に失敗しているはずなのにミリオンは解読したらしい。バラ色に頬を染めて、本当に喜んでいうようだ。

酷い出来だが、喜んでくれるならいいか

「すっげえ嬉しい。俺、一生大事にする。片時も手離さない」

「いや、使え。さっさと汚して使い捨てろ。演習で泥だらけになるから汚れが目立たなさそうな柄を選んだのに」

「いやだ。絶対汚さない」

押し問答は私が眠りに落ちる直前まで続いた。

目覚めると、当たり前だがミリオンはいなかった。

もしかしたらあれは夢だったのかもしれないなと思ったが。引き出しの中のハンカチはなくなっていた。

演習上に戻る途中、全速力で走りながらにやける顔が止まらなかった。この上なく移動術は上手く動いていたし、隠蔽術も巧妙に動作していた。

胸元に手を当てる。この中にはレニーが刺しゅうしてくれたハンカチが入っている。新しく増えた、俺の宝物。

寝間着のレニー、すごく可愛かったな。俺がプレゼントした兔のぬいぐるみを抱えていた。俺の代わりだと思ってくれてるならすごく嬉しい。あれが俺だったらと妄想してみる。ああ、やばいそれに、引き出しの中には俺からの手紙も入っていた。一瞬しか確認してないけれど、ひとつひとつが丁寧に扱われているのに、紙は

疲れていて何度も読み返した跡があった。

レニーが俺の手紙を大事にしている。そう思うだけでニヤつきが止まらなくて、テンションが上がったまま満開の笑顔で演習区域に戻ると、即効で巨木に向かう。

目眩ましは動作し続けているので、俺の不在はバレてないようだ。黒い服を見つけると気配を消して接近し、背後から声をかける。

「なあ、俺と勝負しよう。俺が負けたらこの演習の最優秀者をお前に譲る。勝てたらその巾着をくれ」

「…断ったらどうする」

手でポケットを覆うようにして奴は言う。

お前にとってはその布袋じゃないか。何故そんなに大切にする？

「強硬手段をとらせてもらう」

俺は暗く笑った。

ああ、今ならなんだってできそうだ。

ミリオンはずいぶん早く帰ってきた。なんでも、演習が早く終わったらしい。

一瞬怪我して途中で帰ったのかと心配したが、その必要なかったな。

「レニーに会いたくて、早く終わらせたんだ」

そんなこと出来るのか？

「“全員が脱落すれば”演習は続けられなくなるから」

「誰も残らなかったのか？」

「うん。“俺以外は”ね」

「そうか。ミリオンは頑張ったんだな」

きつと仲間が脱落していく中最後の一人になっても必死になって頑張り続けたに違いない。

「ミリオンは凄いな」

そう言っているとミリオンは嬉しそうに笑いながら、グレープフルーツの皮をむく。

「俺はレニーと合わせて二人分だから」

だいぶ後になって、演習場の悪魔という噂話をきいた。笑いながら突如仲間を倒し続けた生徒がいたそうでその演習科目は二度と行なわれることがなかったという。

この学院は歴史があるから、いろんな伝説があるんだな。

演習と巾着 後編（後書き）

ちなみに学院と演習場は東京と名古屋くらいは距離あります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4362o/>

レニーの入院生活日記

2011年11月14日15時45分発行